The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『管子』の「道」について
Author(s)	高田, 哲太郎
Citation	中国研究集刊. 2011, 53, p. 27-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 崐号（総五十三号）平成二十三年六月 二七―六〇頁

『管子』の「道」について

髙田哲太郎

はじめに

『管子』は『漢書藝文志』では「道家」に分類されるが、『隋書經籍志』以下『四庫提要』までは「法家」に分類され、金谷治氏は「雑家」に分類する(注1)。『漢書藝文志』、つまり『管子』を編集した劉向の視点から「道家」に見えたものが、六朝期の玄学清談を経由した唐代の『隋書經籍志』以下『四庫提要』までの科挙官僚の儒教的視点からは「法家」に見え、『老子』、『荘子』を「道家」の中心とし、又「儒家」、「法家」等についての学説をそれぞれ確立して来た近代研究者の視点からは「雑家」に見えるのは見る側の変化とも考えられるが、いずれにせよこの前提の分立が『管子』の総合的研究の阻害要因であり、それ故に金谷氏の研究も出た訳だが、『管子』を雑駁な資料集として来た従来の認識は現在でも変更されていない(注2)。

勿論『管子』の研究史に於いては、既に原宗子氏が一九八四年に「『管子』研究の現状と課題」(注3)で「管子の統一原理を措定していくべきであろう。」と指摘し、その後金谷治氏が一九八七年に『管子の研究』で『管子』を「管仲」と切り離して戦国以降の作とし、各篇ごとの作者と年代を推定した羅根澤『管子探原』(注4)の成果と、『管子』の中心思想を儒家思想を含む特殊な斉の法家思想と想定した張岱年『中国哲学史史料学』(注5)を踏まえ、書物の統一的な意味を馬王堆、銀雀山出土の新資料を視野に入れて考察し、『管子』書を一貫する思想性として「現実主義的な政治と経済の書であり、自然法的秩序を尊重する道法思想を基底に持つ」斉の「管仲学派」による編集物としているが(注6)、この「道法思想」をその思想的基底としながら「雑家」とし、それを『管子』の統一的

視点とする指摘は、研究の方向性に影響を与える事はなかった様である(注7)。

そこで本論は『漢書藝文志』が「道家」とした事を前提とし、果たしてどのような視点からなら『管子』が「道家」に分類できるのかを、その「道」概念の展開を分析する事により明らかにする(注8)。

始めに『管子』中の「道」の用例を概観しておくと、原義的な「道路」の意味、又「内業篇」の「それ道は形を充たす所以なり」等の思想的な意味を考え得るもの、更に「方法」、「手段」といった通義的なものの三つに便宜的に分けられる(注9)。

「經言」にはほぼ均等にこの三種類の用例が有り、若干「方法」の例は少なく、「外言」、「區言」は「道路」の比重が低く思想的用例が突出し、「内言」は通義的用例の比重が高く、「短語」は思想的と通義的用例が均衡し、「雑篇」は「道路」の例は多くあるが、ほとんど思想的用例は無く、「解」、「輕重」は通義的用例の比重が高くなる。概ねの傾向として抽象度が高く中心思想とされる諸篇を含む部分は思想的用例の比重が高く、具体的な話題の部分では通義的用例の比重が高くなるのは当然の結果だが、ここでは同じ「道」でも意味内容には程度や次元の差が有るという点を確認しておく。

一「神」概念から「道」概念へ

先ず「道」の展開を述べたと思われる資料を見ると、

(1) 清神は心を生じ、心は規を生じ、規は矩を生じ、矩は方を生じ、方は正を生じ、正は曆を生じ、曆は四時を生じ、四時は萬物を生ず。聖人因りて之を理め、道徧し。(清神生心、心生規、規生矩、矩生方、方生正、正生曆、曆生四時、四時生萬物。聖人因而理之、道徧矣。)　(輕重己)

とあり、ここでは「清神」から生ずる「萬物」の形成過程を述べている。これは『老子』42章の「道は一を生じ、一は二を生じ、三は萬物を生ず。」に類似しているが、この「神」概念は『管子』の他の諸篇からすると最上位の根源を示す概念ではない。そこでこの「神」概念から形而上の「道」概念に遡る事とする。「神」は全篇に55例見られるが(注10)、概ね「鬼神」系統24例と「神明」系統25例の二つに分類される。

「鬼神」(注11)

「鬼神」は「精氣」と置き換えられる。

（2）故に曰く、之を思ふと。之を思ひて得ざれば、鬼神之を敎ふ。鬼神の力に非ず、精氣の極なり。氣に一にして能く變ずるを精と曰ひ、事に一にして能く變ずるを智と曰ふ。（故曰、思之。思之不得、鬼神敎之。非鬼神之力也、其精氣之極也。一氣能變曰精、一事能變曰智。）（心術下）

「精氣」とは人の外側の天地間に無限に流動して物を生みだす「物之精」である。

（3）凡そ物の精、此れ則ち生を爲す。下は五穀を生じ、上は列星と爲る。天地の間に流行する、之を鬼神と謂ふ。胸中に藏する、之を聖人と謂ふ。是の故に民気は、杲乎として天に昇るが如く、杳乎として淵に入るが如く、淖乎として海に在るが如く、卒乎として己に在るが如し。（凡物之精、此則爲生。下生五穀、上爲列星。流於天地之間、謂之鬼神。藏於胸中、謂之聖人。是故民氣、杲乎如登於天、杳乎如入於淵、淖乎如在於海、卒乎如在於己。）（内業）

この「物之精」である「鬼神」と同質なのが「龍」である。

（4）龍は水より生じ、五色を被りて游ぶ、故に神なり。小ならんと欲すれば則ち化して蠶蠋の如く、大ならんと欲すれば則ち天下を藏し、上たらんと欲すれば則ち雲氣を凌ぎ、下たらんと欲すれば則ち深泉に入る。變化に日無く、上下に時無し、之を神と謂ふ。（龍生於水、被五色而游、故神。欲小則化如蠶蠋、欲大則藏於天下、欲上則凌於雲氣、欲下則入於深泉。變化無日、上下無時、謂之神。）（水地）

この「龍」として現象する「神」は、「利」や「天地」と同様に人の外側の対応すべき相対的現象である。

（5）利は法る可からず、故に民は流る。神は法る可からず、故に之に事ふ。天地は留む可からず、故に動きて故を化し新に從ふ。（利不可法、故民流。神不可法、故事之。天地不可留、故動化故從新。）（侈靡）

それ故に「神」は、幸いを齎す可能性を持ち、道義的行為で感応させ得るものである。

（6）管子曰く、未し。將に神を御し寶を用ひんとすと。
（管子曰、未也。將御神用寶。）　（山權數）

（7）故に曰く、舟に濟る者は水に和し、人に義なる者は其の神に祥せらると。（故曰、濟於舟者和於水矣、義於人者祥其神矣。）　（白心）

そしてこの「神」は「鬼」と置き換えられる。

（8）故に曰く、鬼に祥せらるる者は人に義あり、兵は義あらずんば不可なりと。（故曰、祥於鬼者義於人、兵不義不可。）　（白心）

従って「鬼」も「神」も同義で、人が制御できる存在と考えられる。

（9）天は時を以て使ひ、地は材を以て使ひ、人は德を以て使ひ、鬼神は祥を以て使ひ、禽獸は力を以て使ふ。（天以時使、地以材使、人以德使、鬼神以祥使、禽獸以力使。）　（樞言）

これが「氣」の集積とされる「鬼神」である(注12)。それ故に「鬼神」は人が肉や穀物を食する様に「氣」を取り込むと思われる。

（10）庚子を睹、金行もて御す。天子令を出し、祝宗に命じ禽獸の禁、五穀の先づ熟する者を選び、之を祖廟と五祀とに薦む。鬼神は其の氣を饗け、君子は其の味を食す。（睹庚子金行御。天子出令、命祝宗選禽獸之禁、五穀之先熟者、而薦之祖廟與五祀、鬼神饗其氣焉。君子食其味焉。）　（五行）

「神明」(注13)

次に「神明」は、「神」が「明」の上位とされる。

（11）夫れ國をして常に患無く名利並び至ら使むる者は、神聖なり。國、危亡に在るも能く壽ならしむる者は、明聖なり。（夫使國常無患而名利並至者、神聖也。國在危亡而能壽者、明聖也。）　（霸言）

この「神明」は「鬼神」同様人の外側に在る。

（12）黄帝六相を得て天地治まり、神明至る。蚩尤は天

道に明らかなり。故に當時爲ら使む。（黄帝得六相而天地治、神明至。蚩尤明乎天道。故使爲當時。）

（五行）

つまり「神明」は人の内側に来て宿り「智」を生み出す「神」である。

（13）道は遠からざるも極め難し。人と並び處るも得難し。其の欲を虚にせば、神將に舍に入らんとす。不潔を掃除せば、神乃ち留り處る。人皆智ならんと欲するも、而其の智なる所以を索むる莫きか。（道不遠而難極也。與人並處而難得也。虚其欲、神將入舍。掃除不潔、神乃留處。人皆欲智、而莫索其所以智乎。）

（心術上）

そして、右の「心術篇」からすると厳密には「智」を「智」とする働きが「神」である。従って「禮義は、人君の神なり。（禮義者、人君之神也。）」（侈靡）と範囲が限定されても、やはり「神」は生みだされた「禮義」概念ではなく、その概念を生みだす働きと思われる。更に「神明」は「德」とも置き換えられる。

（14）形正しからざれば、德來らず。中靜ならざれば、心治まらず。形を正し德を攝し、天仁地義なれば、則ち淫然として自ら至る。神明の極、照乎として知あり。（形不正、德不來。中不靜、心不治。正形攝德、天仁地義、則淫然而自至。神明之極、照乎知。）

（内業）

しかし、いずれにせよ「神明」は「智」の原点である。それは「天地」が無限に物を生みだす様に無限に「智」を生みだすとされる。

（15）能く予へて取る無き者は、天地の配なり。怠倦者は及ばず。廣する無き者は神かと疑はる。神は内に在り、及ばざる者は門に在り。内に在る者は將に假さんとし、門に在る者は將に待たんとす。（能予而無取者、天地之配也。怠倦者不及。無廣者疑神。神者在内、不及者在門。在内者將假、在門者將待。）

（形勢）

そして「神」は「理」に連なると解釈される。

（16）規矩を以て方圜を爲せば則ち成り、尺寸を以て長

短を量れば則ち得、法數を以て民を治むれば則ち安なり。故に事、理を廣せざる者は、其の成るや神の若し。故に曰く、廣する無き者は神かと疑はる。（以規矩爲方圜則成、以尺寸量長短則得、以法數治民則安。故事不廣於理者、其成若神。故曰、無廣者疑神。）

（形勢解）

「理」は「神」の妥当性を説明する概念である。だが「神」自体は「物」に一体化して在り方を変化させる能力、又威力である。

（17）①物に一にして能く化す、之を神と謂ふ。事に一にして能く變ず、之を智と謂ふ。化するも氣を易へず、變ずるも智を易へざるは、惟だ一を執るの君子能く此を爲す乎。一を執りて失はざれば、能く萬物に君たり。君子は物を使ひ、物の使と爲らず。一の理を得。（一物能化、謂之神。一事能變、謂之智。化不易氣、變不易智、惟執一之君子能爲此乎。執一不失、能君萬物。君子使物、不爲物使。得一之理。）

（内業）

②蛟龍水を得れば、神、立つ可し。虎豹幽に託すれば、威、載す可し。（蛟龍得水、而神可立也。虎豹託幽、而威可載也。）

（形勢）

この外から来る「神」は、それ故に人の内なる「情」と対置される。

（18）聖人は、陰陽もて理む。故に外を平にして中を險にす。故に其の情を信ばす者は其の神を傷け、其の質を美にする者は其の文を傷く。（聖人者、陰陽理。故平外而險中。故信其情者傷其神、美其質者傷其文。）

（侈靡）

この様に「神明」としての「神」は「徳」と同系統で外から来て無限に展開する。

（19）形正しからざる者は、徳來らず。中精ならざる者は、心治まらず。形を正し徳を飾むれば、萬物畢く得、翼然として自ら來り、神其の極を知る莫し。昭に天下を知り、四極に通ず。（形不正者、徳不來。中不精者、心不治。正形飾徳、萬物畢得、翼然自來、神莫知其極。昭知天下、通於四極。）

（心術下）

この「徳」は「氣之精」と同義である。

(20) 是の故に聖人は時と與に變ずるも化せず、物に從ふも移らず。能く正、能く靜、然る後能く定る。定心中に在れば、耳目聰明、四枝堅固、以て精の舍と爲す可し。精なる者は、氣の精なる者なり。氣は、道乃ち生ず。生ずれば乃ち思ひ、思へば乃ち知り、知れば乃ち止る。(是故聖人與時變而不化、從物而不移。能正、能靜、然後能定。定心在中、耳目聰明、四枝堅固、可以爲精舍。精也者、氣之精者也。氣、道乃生。生乃思、思乃知、知乃止矣。)　(內業)

従って「神明」としての「神」も「氣」と置き換えられる。

(21) 神有り自ら身に在り、一往一來するも、之を能く思ふ莫し。之を失はば必ず亂れ、之を得れば必ず治る。敬みて其の舍を除さば、精、將に自ら來らんとす。精想して之を思ひ、寧念して之を治め、嚴容畏敬あれば、精、將に至り定まらんとす。(有神自在身、一往一來、莫之能思。失之必亂、得之必治。敬除其舍、精將自來。精想思之、寧念治之、嚴容畏敬、精將至定。)　(內業)

そして「氣之精」は、(引用3)の「鬼神」としての「物の精」に合致するが、「神明」は「神明の德は、正靜其の極なり。(神明之德、正靜其極也。)」(九守)とある様に、「正靜」の状態が極点とされる。

以上が「神明」であるが、残りの「神明」とも「鬼神」とも考えられる二例は、先ず次の例では「神」が「氣」に一体化する。これは「氣」と同質だからである。それ故に「神」は「精氣」と置き換えられる。

(22) 氣を摶にすること神の如ければ、萬物備り存す。能く摶なる乎。能く一なる乎。能く卜筮無くして吉凶を知る乎。能く止る乎。能く已む乎。能く諸を人に求むる勿くして之を己に得る乎。之を思ひ、之を思ひ、又た重ねて之を思ふ。之を思ひて通ぜざれば、鬼神將に之を通ぜんとす。鬼神の力に非ず、精氣の極なり。(摶氣如神、萬物備存。能摶乎。能一乎。能無卜筮而知吉凶乎。能止乎。能已乎。能勿求諸人而得之己乎。思之、思之、又重思之。思之而不通、鬼神將通之。非鬼神之力也、精氣之極也。)　(內業)

又次の例では、「鬼神」が「神」なる「智者」である桓公

に使役される。これは「鬼神」が「神明」と同質である証拠である。

(23) 龍、馬謂の陽、牛山の陰に鬪ふ。管子入りて桓公に復して曰く、天、使者をして君の郊に臨ましむ。請ふ、大夫をして左右に初飭し、天の使者に玄服せしめん乎と。天下之を聞きて曰く、神なる哉、齊の桓公、天、使者をして君の郊に臨ましむと。兵を擧ぐるを待たずして朝する者、八諸侯。此れ天威に乘じて天下を動かすの道なり。故に智者は鬼神を役使し、愚者は之を信ず。(龍鬪於馬謂之陽、牛山之陰。管子入復於桓公曰、天使使者臨君之郊。請使大夫初飭左右、玄服天之使者乎。天下聞之曰、神哉齊桓公、天使使者臨君之郊。不待擧兵而朝者八諸侯。此乘天威而動天下之道也。故智者役使鬼神、而愚者信之。)
(輕重丁)

以上からすれば「神」は「氣」即ち「物」から成り立つ。従って「神」は根源ではない。

「氣」

すると次に「神」を生み出す「氣」或いは「物」が問題となる。「氣」は60例あるが12例は「内業篇」に在り、全篇の「氣」概念のまとめとも思われる(注14)。この「氣」は、

(24) 氣は道乃ち生ず。生ずれば乃ち思ひ、思へば乃ち知り、知れば乃ち止る。凡そ心の形、知を過ごせば生を失ふ。(氣、道乃生、生乃思、思乃知、知乃止矣。凡心之形、過知失生。)
(内業)

とある様に「道」が生み出し、「德」に基いて種々の「氣」に分節する(注15)。

(25) 東方を星と曰ひ、其の時を春と曰ひ、其の氣を風と曰ふ。風は木と骨とを生ず。其の德は嬴を喜び節時を發出す。(東方曰星、其時曰春、其氣曰風。風生木與骨。其德喜嬴而發出節時。)
(四時)

「氣」は「德」を含むが、「德」は「氣」の上位概念である。

(26) 是の故に此の氣や、止むるに力を以てす可からざるも、安ずるに德を以てす可し。呼ぶに聲を以てす

可からざるも、迎ふるに音を以てす可し。敬守して失ふ勿き、是れを成德と謂ふ。德成りて智出で、萬物果く得。（是故此氣也、不可止以力、而可安以德。不可呼以聲、而可迎以音。敬守勿失、是謂成德。德成而智出、萬物果得。）（內業）

この「氣」は「生」の条件とされる。

（27）①天地の氣に根して、寒暑の和、水土の性、人民鳥獸草木の生あり。物、甚しくは多からずと雖も、皆均しく有り、而して未だ嘗て變ぜざるなり。之を則と謂ふ。（根天地之氣、寒暑之和、水土之性、人民鳥獸草木之生。物雖不甚多、皆均有焉、而未嘗變也。謂之則。）（七法）

右の例では「天地之氣」が自然現象と生物の本である。又次の例は「物」の前提が「氣」であると思われる。

②坦氣修通すれば、凡そ物は靜を開き、形は理を生ず。（坦氣修通、凡物開靜、形生理。）（幼官）

次の例は「氣」が「生」の条件である事を明言する。

③故に曰く、氣有れば則ち生じ、氣無ければ則ち死す、生なる者は其の氣を以てす。（故曰、有氣則生、無氣則死、生者以其氣。）（樞言）

つまり「氣」は既に見た「物」を生命体にする（引用2）の「物之精」であり、人の内外を往来するものとされる。

（28）①邪氣內に入れば、正色乃ち衰ふ。（邪氣入內、正色乃衰。）（形勢）

右の例は現象として人の中に入る「氣」が具体的傾向を持つ事を示す。又次の例は「心」を往来する「靈氣」が「道」を安定させる前提とされる。

②靈氣心に在り、一たび來り一たび逝く。其の細は內無く、其の大は外無し。之を失ふ所以は、躁を以て害を爲せばなり。心能く靜を執らば、道將に自ら定まらんとす。得道の人は、理丞けて屯泄し、匈中敗る無し。節欲の道あらば、萬物害せず。（靈氣在心、一來一逝。其細無內、其大無外。所以失之、以躁爲害。心能執靜、道將自定。得道之人、理丞而屯

泄、匈中無敗。節欲之道、萬物不害。）　（内業）

更に次の例は「氣」が人から出る場合の描写である。

③全心在中に在り、蔽匿す可からず。形容に和し、膚色に見はる。善氣もて人を迎ふれば、弟兄より親あり。惡氣もて人を迎ふれば、戎兵より害あり。（全心在中、不可蔽匿。和於形容、見於膚色。善氣迎人、親於弟兄。惡氣迎人、害於戎兵。）　（内業）

この様に「物之精」としての「氣」は具体的に展開するが、それ自体は一定の形を持たない。形は「地」が与えるものとされる。

（29）凡そ人の生まるるや、天、其の精を出し、地、其の形を出し、此を合して以て人と爲る。（凡人之生也、天出其精、地出其形、合此以爲人。）　（内業）

しかし、形を持てば水や蒸気、或いは人の表情として現れるものとされる。次の例は具体的な天の雲である。

（30）①日月は、萬物を昭察する者なり。天雲氣多く、蔽蓋する者衆ければ、則ち日月明ならず。（日月、昭察萬物者也。天多雲氣、蔽蓋者衆、則日月不明。）　（形勢解）

又次の例は表情として現れた「氣」である。

②毛嬙、西施は、天下の美人なるも、怨氣面に盛なれば、以て好す可しと爲す能はず。（毛嬙、西施、天下之美人也、盛怨氣於面、不能以爲可好。）（小稱）

更に「氣」は「神」同様に制御できるものとされる。次の例は「六氣」が「生」であり、「聖人」はこれを妥当に制御する事を述べる。

（31）①管仲對へて曰く、滋味動靜は、生の養なり。好惡喜怒哀樂は、生の變なり。聰明物に當るは、生の德なり。是を故て聖人は滋味を齊へ動靜を時とし、六氣の變を御正し、聲色の淫を禁止す。邪行體に亡く、違言口に存せず。靜然として生を定むるは聖なり。（管仲對曰、滋味動靜、生之養也。好惡喜怒哀樂、生之變也。聰明當物、生之德也。是故聖人齊滋味而時動靜、御正六氣之變、禁止聲色之淫。邪行亡乎體、

違言不存口。靜然定生、聖也。）　（戒）

又次の例は治安を維持する事で「氣」を制御できるとする。

②天子令を出し、左右、使人、內御に命じ其の氣を御せしめ、足れば則ち發して止め、其の氣足らざれば、則ち發して盜賊を蕁瀆す。（天子出令、命左右使人內御御其氣、足則發而止、其氣不足、則發蕁瀆盜賊。）　（五行）

要するに「氣」は人が制御できる物や身の內容であり、（引用10）にあった様に「鬼神」の構成要素である。又次の例では生命を生みだす「地」の源であり、

（32）①故に春政禁ぜざれば、則ち百長生ぜず。夏政禁ぜざれば、則ち五穀成らず。秋政禁ぜざれば、則ち姦邪勝へず。冬政禁ぜざれば、則ち地氣藏せられず。（故春政不禁、則百長不生。夏政不禁、則五穀不成。秋政不禁、則姦邪不勝。冬政不禁、則地氣不藏。）　（七主七臣）

次の例では人の構成要素であり、

②形正しからざる者は、德不來らず。中精ならざる者は、心治まらず。形を正し德を飾めば、萬物畢く得、翼然として自ら來り、神、其の極を知る莫く、昭に天下を知り、四極に通ず。是の故に曰く、物を以て官を亂す無れ、官を以て心を亂す毋れと、此を之れ內德と謂ふ。是の故に意氣定り、然る後に正に反る。氣は、身の充なり。行は、正の義なり。充美ならざれば則ち心得ず。行正しからざれば則ち民服さず（形不正者、德不來。中不精者、心不治。正形飾德、萬物畢得、翼然自來、神莫知其極、昭知天下、通於四極。是故曰、無以物亂官、毋以官亂心、此之謂內德。是故意氣定、然後反正。氣者、身之充也。行者、正之義也。充不美則心不得。行不正則民不服。）　（心術下）

次の例では人の生命力、血気とされる。

③凡そ食の道、大充すれば、傷れて形臧せず。大攝すれば、骨枯れて血沍る。充攝の間、此を和成と謂ふ。精の舍る所にして、知の生ずる所なり。飢飽の度を失ふや、乃ち之が圖を爲す。飽かば則ち疾動

し、飢うれば則ち廣思し、老すれば則ち長慮す。飽くも疾動せざれば、氣四末に通ぜず。飢うるも廣思せず、飽くも廢せず、老するも長慮せざれば、困して乃ち速に竭く。(凡食之道、大充、傷而形不臧。大攝、骨枯而血沍。充攝之間、此謂和成。精之所舍、而知之所生。飢飽之失度、乃爲之圖。飽則疾動、飢則廣思、老則長慮。飽不疾動、氣不通於四末。飢不廣思、飽而不廢、老不長慮、困乃速竭。)　(内業)

従って「氣」の変化は自然の変化や人の気持ち、気分となるが(注15参照)、その中の「精氣」は(引用22)の「神」であり、(引用20)で見た「心」に宿る。

(38) 精存すれば自ら生じ、其の外安榮。内に藏して以て泉原と爲し、疾然和平、以て氣淵と爲す。淵の涸れざれば、四體乃ち固く、泉の竭きざれば、九竅遂に通ず。乃ち能く天地を窮め、四海を被ふ。中に惑意無く、外に邪菑無し。心中に全く、形外に全く、天菑に逢はず、人害に遇はず。之を聖人と謂ふ。(精存自生、其外安榮。内藏以爲泉原、疾然和平、以爲氣淵。淵之不涸、四體乃固、泉之不竭、九竅遂通。乃能窮天地、被四海。中無惑意、外無邪菑。心全於中、形全於外、不逢天菑、不遇人害。謂之聖人。)　(内業)

この様な「心」が「天地を窮め、四海を被ふ」もので「九竅」に通じる「氣淵」ならば、その構成要素の「氣」は「物」の前提である。

「物」(注16)

そこでこの「氣」によって成り立つ「物」及び「物」としての「地」、「天」を概観する。先ず「物」とは「我」の対象の総称である。

(39) 故に聖人は博く聞き、多く見、道を畜へ、以て物を待つ。物至れば形に對し、曲均存す。(故聖人博聞、多見、畜道、以待物。物至而對形、曲均存矣。)　(宙合)

又「萬物」とは「名」によって概念分類された対象の全体を指す。

(40) 名は、聖人の萬物を紀する所以なり。(名者、聖人之所以紀萬物也。)　(心術上)

その間には「衆物」、「財物」、「生物」、「異物」などの限定された概念がある。この「物」、即ち「萬物」は「天地」を外周概念とする。

(41) 天地は、萬物の槖、宙合は天地を槖する有り。(天地、萬物之槖、宙合有槖天地。) (宙合)

それ故に「物」の発生源は、「淵」、「水」、「氣」、「地」、「天」、「四時」、「道」、「德」、「虛」が挙げられているが、その内の「淵」は大きな穴としての「地」である。

(42) 淵は、眾物の生ずる所なり。(淵者、眾物之所生也。) (形勢解)

又そこに在る「水」は「地之血氣」である。

(43) 水は、地の血氣、筋脈の通流の如き者なり。(水者、地之血氣、如筋脈之通流者也。) (水地)

この「水」は「四海」として「地」の周辺にも在る。

(44) 宙合の意は、上は天の上に通じ、下は地の下に泉し、外は四海の外に出、天地を合絡して、以て一裹と爲す。(宙合之意、上通於天之上、下泉於地之下、外出於四海之外、合絡天地、以爲一裹。) (宙合)

従って「物」は「四海」に囲まれた「地」から生み出される事になる。

「地」(注17)

故に「地」は「萬物之本原」とされる。

(45) 地は、萬物の本原、諸生の根菀なり。美惡、賢不肖、愚俊の生ずる所なり。(地者、萬物之本原、諸生之根菀也。美惡、賢不肖、愚俊之所生也。) (水地)

「地」は「形」が有る事で「地」とされる。

(46) 天に常象有り、地に常形有り、人に常禮有り、一たび設けて更めず、此れを三常と謂ふ。(天有常象、地有常形、人有常禮、一設而不更、此謂三常。) (君臣上)

従って、「形」が有る以上「物」である。

(47) 物固より形有り。形固より名有り。名の當る、之を聖人と謂ふ。(物固有形。形固有名。名當、謂之聖人。)　(心術上)

そして「物」は「氣」を不変の構成要素とする。

(48) 物に一にして能く化す、之を神と謂ふ。事に一にして能く變ず、之を智と謂ふ。化するも易氣を易へず、變ずるも智を易へず。(一物能化、謂之神。一事能變、謂之智。化不易氣、變不易智。)　(内業)

この「物」である「地」は、「水」と共に「天」の下にあった。

「天」(注18)

その「天」は、「四時」として下される天「命」の根拠である。

(49) 天は四時を生じ、地は萬財を生じ、以て萬物を養ひて取る無し。(天生四時、地生萬財、以養萬物而無取焉。)　(形勢解)

(50) 天に法り德に合す。德に合すれば長久なり。德に合して兼ねて之を覆さば、則ち萬物命を受く。(法天合德。合德長久。合德而兼覆之、則萬物受命。)　(版法解)

「天」は(引用46)にある様に、「象」、即ち「形」を持つが、その形とは空間としての「虚」である。

(51) ①天を虚と曰ひ、地を靜と曰ふ。(天曰虚、地曰靜。)　(心術上)

この「虚」という「形」は「聖人」の生みだす概念として認識されるものとされる。

②故に曰く、陰陽の從を修め、天地の常を道とす。嬴を嬴とし縮を縮とし、因りて當を爲す。死を死とし生を生とし、天地の形に因る。天地の形は、聖人之を成す。小しく取る者は小しく利あり、大に取る者は大に利あり。盡く之を行ふ者は天下を有す。(故曰、修陰陽之從、而道天地之常。嬴嬴縮縮、因而爲

當。死死生生、因天地之形。天地之形、聖人成之。小取者小利、大取者大利。盡行之者有天下。）（勢）

しかし「天」も又「物」であり「氣」を含む。

（52）地の變氣は、其の出る所に應ず。水の變氣は、之に應ずるに精を以てし、之を受くるに豫を以てす。天の變氣は、之に應ずるに正を以てす。且つ夫れ天地の精氣五有りて、必ずしも沮を爲さず。其の亟るや而ち反る。其の重陔動毀の進退、即ち此れ數の得難き者なり、此れ形の時變なり。（地之變氣、應其所出。水之變氣、應之以精、受之以豫。天之變氣、應之以正。且夫天地精氣有五、不必爲沮。其亟而反。其重陔動毀之進退、即此數之難得者也、此形之時變也。）（侈靡）

「天」は不動の「天極」を中心とするが、

（53）人先づ之を生じ、天地之を刑あらしめ、聖人之を成せば、則ち天と極を同じくす。（人先生之、天地刑之、聖人成之、則與天同極。）（勢）

ほぼ恒常的に回転する事で「四時」を生みだし「萬物」を変化させる。

（54）故に天は動かず、四時下に云りて萬物化す。（故天不動、四時云下而萬物化。）（戒）

従って「虚」である「天」は「萬物」、「天下」の始めとなる。

（55）虚は、萬物の始なり。故に曰く、以て天下の始と爲す可しと。（虚者、萬物之始也。故曰、可以爲天下始。）（心術上）

だが（引用23）にあった様に、「天」は擬人化されはするが主宰者ではない。

（56）故に樹木の霜露に勝ふる者は、令を天より受けず。家其の所に足る者は、聖人に從はず。（故樹木之勝霜露者、不受令於天。家足其所者、不從聖人。）（輕重乙）

何故なら「天」は「道」に生み出された「物」だからで

ある。

(57) 道は天地を生じ、徳は賢人を出す。道は徳を生じ、徳は正を生じ、正は事を生ず。(道生天地、徳出賢人。道生徳、徳生正、正生事。　(四時)

しかし同じ「物」でも「神」とは異なり、合理的根拠となる「物」である。

(58) 天其の常を變へず、地其の則を易へず、春秋冬夏其の節を更めざるは、古今一なり。(天不變其常、地不易其則、春秋冬夏不更其節、古今一也。)(形勢)

「物」としての「天」は「地」同様「氣」の変化であり、乾燥等の現象がある。

(59) 春三月、天地乾燥し、水糾列するの時なり。山川涸落し、天氣は下り、地氣は上り、萬物は交通す。(春三月、天地乾燥、水糾列之時也。山川涸落、天氣下、地氣上、萬物交通。)　(度地)

この「天」は人に「無私」に恩恵を与える。

(60) 能く予へて取る無き者は、天地の配なり。(能予而無取者、天地之配也。)　(形勢)

又災害も「時」ならずして下るとされるのは、「天」が「時」を基準に認識される相対的な現象だからである。

(61) 凡そ天の菑害の下るや、君子は謹みて之を避く。故に八九は死せず。大寒大暑、大風大雨、其の至るに時ならざる者は、此を四刑と謂ふ。(凡天菑害之下也、君子謹避之。故不八九死也。大寒大暑、大風大雨、其至不時者、此謂四刑。)　(度地)

それ故に「時」が「天」の現象を支配するとされる。

(62) 天は時を以て權と爲し、地は財を以て權と爲し、人は力を以て權と爲し、君は令を以て權と爲す。天の權を失へば、則ち人地の權亡ぶ。(天以時爲權、地以財爲權、人以力爲權、君以令爲權。失天之權、則人地之權亡。)　(山權數)

つまり存在の前提、「有る」の前提は、「天」の「時」の

変化という事である。この様な「物」である「天地」と「四海」の外側は「物」以上、形而上の世界という事になる。現象の前提、「有」の前提としての「無」は「虚無無形」であるから、その外側を指す（引用41）、（引用44）の「宙合」は「虚無無形」の「徳」或いは「道」と同義考えられる。従って「宙合」の内側に有る「天地萬物」という有形の「物」は、「氣」によって構成され「道」或いは「徳」を前提とする事になる。

（63）道は天地を生じ、徳は賢人を出す。道は徳を生じ、徳は正を生じ、正は事を生ず。是を以て聖王は天下を治め、窮すれば則ち反り、終れば則ち始む。徳は春に始り、夏に長ず。刑は秋に始り、冬に流る。刑徳失はざれば、四時一の如し。（道生天地、徳出賢人。道生徳、徳生正、正生事。是以聖王治天下、窮則反、終則始。徳始於春、長於夏。刑始於秋、流於冬。刑徳不失、四時如一。）（四時）

そこで次に「徳」概念を分析する。

「徳」

「徳」は「道」の用例の半数程度148例だが、その出現傾向には特徴的なものが有る。先ず「徳」は「心術上篇」で「道」と同義と定義される。

（64）徳は、道の舎なり。物得て以て生ず。生じて得るを知り以て道の精を職る。故に徳なる者は得なり。得なる者とは、其の以て然るを得る所を謂ふなり。無爲を以てするを之れ道と謂ひ、之を舎すを之れ徳と謂ふ。故に道の徳と間無し。故に之を言ふ者は別たざるなり。（徳者、道之舎。物得以生。生知得以職道之精。故徳者得也。得也者、其謂所得以然也。以無爲之謂道、舎之之謂徳。故道之與徳無間。故言之者不別也。）（心術上）

故に「道」同様に虚無無形の「物」の根拠である。

（65）虚無無形、之を道と謂ふ。萬物を化育す、之を徳と謂ふ。（虚無無形、謂之道。化育萬物、謂之徳。）（心術上）

そして「天地」に於いては「萬物」を化育し「四時」の展開を輔ける働きとして現れる。

(66) 凡そ人君は、萬民を覆載し兼ねて之を有し、萬族を燭臨して事として之を使ふ。是の故に天地日月四時を以て主と爲し質と爲して、以て天下を治む。天は覆して外無し。其の德在らざる所無し。地は載して棄つる無し。安固にして動かず。(凡人君者、覆載萬民而兼有之、燭臨萬族而事使之。是故以天地日月四時爲主爲質、以治天下。天覆而無外也。其德無所不在。地載而無棄也。安固而不動。)　(版法解)

又(引用63)にあった様に「賢人」を生みだし、恩恵で「心」を結び付ける働きと「正」しさを人に与えるとされる。

(67) 見與の友は、親しからざるに幾し。見哀の役は、結ばざるに幾し。見施の德は、報ひられざるに幾し。四方の歸する所は、心の行く者なり。(見與之友、幾於不親。見哀之役、幾於不結。見施之德、幾於不報。四方所歸、心行者也。)　(形勢)

(68) 政は、正なり。正なる者は、萬物の命を正定する所以なり。是を故て聖人は精德中を立てて以て正を生じ、正を明らかにして以て國を治む。(政者、正也。正也者、所以正定萬物之命也。是故聖人精德立中以生正、明正以治國。)　(法法)

この様な「德」は(引用63)では「道」が生みだしたもの、(引用64)では「道之舍」とされるが、148例中、「德」の根拠を述べるものの内「兵法篇」の用例は同文なので実際は次の「幼官篇」の一例のみである。

(69) 無端に始り、無窮に卒る。無端に始るは、道なり。無窮に卒るは、德なり。道は量る可からず、德は數ふ可からず。量る可からざれば、則ち爲詐敢て鄉はず。數ふ可からざれば、則ち衆強圖る能はず。兩者備施すれば、動靜功有り。(始乎無端、卒乎無窮。始乎無端、道也。卒乎無窮、德也。道不可量、德不可數。不可量、則衆強不能圖。不可數、則爲詐不敢鄉。兩者備施、動靜有功。)　(幼官)

又「德」自体についてと「物」の発生根拠である事を述べるものは「心術上篇」だけである。そして「天地」の働きとしての「德」についての8例中、6例は「四時篇」だが、5例は重複例で実質は2例である。ここでは一例のみを挙げる。

(70) 中央を土と曰ふ、土の德は實。四時を輔けて入出す。風雨を以て土を節し力を益す。土は皮肌膚を生ず。其の德は和平用均、中正無私。實は四時を輔く。春は嬴育し、夏は養長し、秋は聚收し、冬は閉藏す。大寒なれば乃ち極り、國家は乃ち昌にして、四方は乃ち服す。此を歲德と謂ふ。(中央曰土、土德實。輔四時入出。以風雨節土益力。土生皮肌膚。其德和平用均、中正無私。實輔四時。春嬴育、夏養長、秋聚收、冬閉藏。大寒乃極、國家乃昌、四方乃服。此謂歲德。)　(四時)

そして残りの2例は「版法解篇」にある。要するに形而上の「德」を説明するものは148例中の13例で、残りの135例の用例はすべて形而下の「德」、即ち人に扱われる「心」の働きである。

(71) 衆人の其の心を用ふるや、愛は、憎の始なり。德は、怨の本なり。唯だ賢者のみ然らず。先王、事は以て交を合し、德は以て人を合す。二者合せざれば、則ち成る無く、親しむ無し。(衆人之用其心也、愛者、憎之始也。德者、怨之本也。唯賢者不然。先王、事以合交、德以合人。二者不合、則無成矣、無親矣。)　(樞言)

つまり「德」は「宙合」という「虛無無形」の次元では見えないが、そこから発生する「天地萬物」という「有形」の次元では観察対応でき、その万物の一つである「人」に生じた「心」の次元では人が扱えるものとされる為に、その関心が人の「心」に集中したと思われる。しかもそれが同じ「德」という「ことば」で示される上に、或いは「道德」として並列され、

(72) 言ひて道德、忠信、孝弟を語る者、此の言棄つる無き者なり。(言而語道德、忠信、孝弟者、此言無棄者。)　(形勢解)

更に「德」、「義」、「禮」、「法」、「權」と項目化し、

(73) 德に六興有り。義に七體有り。禮に八經有り。法に五務有り。權に三度有り。(德有六興。義有七體。禮有八經。法有五務。權有三度。)　(五輔)

又「九德」として細分化され、

(74) 夫れ玉の貴き所の者は、九徳出づればなり。夫れ玉、溫潤以て澤あるは、仁なり。鄰以て理あるは、知なり。堅にして蹙らざるは、義なり。廉にして劌らざるは、行なり。鮮にして垢ならざるは、潔なり。折るるも撓らざるは、勇なり。瑕適皆見はるるは、精なり。茂華光澤、並び通じて相ひ陵がざるは、容なり。之を叩かば、其の音清搏遠きに徹し、純にして殺がれざるは、辭なり。(夫玉之所貴者、九徳出焉。夫玉、溫潤以澤、仁也。鄰以理者、知也。堅而不蹙、義也。廉而不劌、行也。鮮而不垢、潔也。折而不撓、勇也。瑕適皆見、精也。茂華光澤、並通而不相陵、容也。叩之、其音清搏徹遠、純而不殺、辭也。)

(水地)

その概念範囲は更に限定され次元は下降し、最後は人に「恩恵」利益を与えるという意味(引用67)として収束すると推定される。要するに同じ「徳」でも次元の差、形而上の「徳」から形而下の人が扱える「徳」のレベルの差が有り、それが同じ「徳」という語で示されている訳である。従って「道」も同様に、前提として推定される「虚無無形」の「道」、観察し対応できる「天地萬物」の「道」、主体的に扱える「人」の「道」の三種類が有る事になると類推される(注19)。

二、「道」概念から形而下へ

先ず「道」自体は無根拠に発生する。

(75) 故に凡そ道は、無根無莖、無葉無榮なるも、萬物以て生じ、萬物以て成る。之に命じて道と曰ふ。(故凡道、無根無莖、無葉無榮、萬物以生、萬物以成。命之曰道。)

(内業)

「虚無無形」(引用65)であり無限に循環し、見る事も概念化もできない(引用69)。

(76) 道なる者は、動きて其の形を見はさず、施して其の徳を見はさざるも、萬物皆以て得。然れども其の極を知る莫し。(道也者、動不見其形、施不見其徳、萬物皆以得。然莫知其極。)

(心術上)

しかし「徳」、「天地」、「萬物」を生みだす(引用57)「形」の前提(引用80)として「無爲」に物を変化させ生滅さ

せる（引用64）。

（77）無設無形にして、以て成る可からざる無し。無形無爲にして、無不可以て化す可からざる無し。此を之れ道と謂ふ。（無設無形焉、無不可以成也。無形無爲焉、無不可以化也。此之謂道矣。）（兵法）

（78）道なる者は、衆物を扶持し、生育して各其の性命を終ふるを得使むる者也。（道者、扶持衆物、使得生育、而各終其性命者也。）（形勢解）

「道」は「物」の背後の「卑」なる根拠であり、

（79）卑なる者は、道の室、王者の器なり。而るに水は以て都居と爲す。（卑也者、道之室、王者之器也。而水以爲都居。）（水地）

「我」と同時に生ずるものとされる。

（80）夫れ道なる者は形を充す所以なるも、人固くする能はず。其の往くや復らず、其の來るや舍らず、謀乎として其の音を聞く莫きも、卒乎として乃ち心に在り、冥冥乎として其の形を見ざるも、淫淫乎として我と俱に生ず。其の形を見ず、其の聲を聞かざるも、序で其れ成る。之を道と謂ふ。（夫道者所以充形也、而人不能固。其往不復、其來不舍、謀乎莫聞其音、卒乎乃在於心、冥冥乎不見其形、淫淫乎與我俱生。不見其形、不聞其聲、而序其成。謂之道。）（内業）

すると「我」も同様に「無端」に始まる訳で、従って「我」は万物を生みだす「道」以外、「道」は「我」以外となる。これは『老子』25章の「物」と「我」の関係の解釈、つまり「物」は「我」以外、「我」とは「物」以外という関係からの敷衍とも思われる。

（81）物有り昆成し、天地に先んじて生ず。寂呵寥呵、獨立して改めず、以て天地の母と爲す可し。吾未だ其の名を知らず、之に字して道と曰ふ。吾強ひて之が名を爲して大と曰ふ。（有物昆成、先天地生。寂呵寥呵、獨立而不改、可以爲天地母。吾未知其名、字之曰道。吾強爲之名曰大。）（『老子』）

しかし、（引用80）からは人の「我」の背後にも根源的「我」

が「道」の影のように連続していると推定される。いずれにしても「物」を生みだす「道」自体は、常に「物」の背後で「物」を変化させ続ける目に見えない存在根拠である。

次に「天地萬物」の「道」は観察し対応できる「道」であり、「道」はこの時点で「天」「地」「人」の概念にその範囲を制約される。

(82) ①政を立て令を出すは、人道を用ふ。爵祿を施すは、地道を用ふ。大事を擧ぐるは、天道を用ふ。(立政出令、用人道。施爵祿、用地道。擧大事、用天道。)(霸言)

②天道は九制を以てし、地理は八制を以てし、人道は六制を以てす。(天道以九制、地理以八制、人道以六制。)(五行)

勿論「道」は「物」以上であり、「天道」自体も虚で「無形」ではある。

(83) ①天の道は虚、地の道は靜。虚なれば則ち屈せず、靜なれば則ち變ぜず。變ぜざれば則ち過無し。(天之道虚、地之道靜。虚則不屈、靜則不變。不變則無過。)(心術上)

②天の道は、虚にして其れ無形なり。(天之道、虚其無形。)(心術上)

だが「天」には観察できる常の「象」、即ち「形」があった(引用46)。「象」とは比較対照して概念規定する事又その対象で、「時」はそのひとつである。

(84) 天下を正すに分有り。則、象、法、化、決塞、心術、計數なり。—中略—義や、名や、時や、似や、類や、比や、狀や、之を象と謂ふ。—中略—象に明らかならずして、論材を論じ用を審にせんと欲するは、猶ほ長を絶ちて以て短と爲し、短を續ぎて以て長と爲すがごとし。(正天下有分。則、象、法、化、決塞、心術、計數。—中略—義也、名也、時也、似也、類也、比也、狀也、謂之象。—中略—不明於象、而欲論材審用、猶絶長以爲短、續短以爲長。)(七法)

つまり「天」を「天」とする「天道」自体は見えないが、「天」が「天」という「形」で現れている以上、その「象」の変化を生みだす「天道」は観察し見える「時」として概念化できるのである(引用51の②)。この様にして「天」

の「道」は「天」の「時」と置き換えられ（引用62）、

（85）昔黄帝は蚩尤を得て天道を明らかにす。―中略―蚩尤は天道に明らかなり、故に當時爲ら使む。（昔者黄帝得蚩尤而明於天道。―中略―蚩尤明乎天道、故使爲當時。）（五行）

測るべき対象、対応すべき対象となる。

（86）能く故道、新道を摩し、國家を定め、然る後に時を化すか。（能摩故道、新道、定國家、然後化時乎。）（侈靡）

次の例は「天道」が「權」るべき「時」である事を示している。

（87）①上は之を天祥に度り、下は之を地宜に度り、中は之を人順に度る。此れ所謂三度なり。故に曰く、天時不祥なれば、則ち水旱有り。地道不宜なれば、則ち饑饉有り。人道不順なれば、則ち禍亂有りと。（上度之天祥、下度之地宜、中度之人順。此所謂三度。故曰、天時不祥、則有水旱。地道不宜、則有饑饉。人道不順、則有禍亂。）（五輔）

②故に天毀れ菁凶にして、旱水泆するも、民溝壑に入りて乞請する者無きなり。此れ時を守りて以て天權を待つの道なり。（故天毀菁凶、旱水泆、民無入於溝壑乞請者也。此守時以待天權之道也。）（山權數）

この「時」とは「四時」、「陰陽」の変化である。

（88）①春秋冬夏は、陰陽の推移なり。時の短長は、陰陽の利用なり。（春秋冬夏、陰陽之推移也。時之短長、陰陽之利用也。）（乘馬）

②是の故に陰陽は、天地の大理なり。四時は、陰陽の大經なり。（是故陰陽者、天地之大理也。四時者、陰陽之大經也。）（四時）

この「陰陽」の変化が「道」とされる。

（89）德無く怨無く、好無く惡無く、萬物一を崇び、陰陽度を同じくするを、道と曰ふ。（無德無怨、無好無惡、萬物崇一、陰陽同度、曰道。）（正）

それは具体的には昼と夜という太陽の変化である。

(90) 日夜の易るは、陰陽の化なり。然らば則ち陰陽は正なり。正ならずと雖も、有餘も損す可からず、不足も益す可からず。天地も之を能く損益する莫きなり也。然らば則ち以て政を正す可き者は地なり。故に正さざる可からず。(日夜之易、陰陽之化也。然則陰陽正矣。雖不正、有餘不可損、不足不可益也。天地莫之能損益也。然則可以正政者地也。故不可不正也。)　(乗馬)

つまり「道」は「天地」の間に具体的存在根拠として現れるのである。

(91) 道の天地の間に在るや、其の大は外無く、其の小は内無し。(道在天地之間也、其大無外、其小無内。)　(心術上)

それが光を生みだす穴としての「日」である。

(92) 四肢六道は、身の體なり。「尹知章云ふ、六道は上に四竅有り、下に二竅有るを謂ふなりと。」(四肢六道、身之體也。「尹知章云、六道謂上有四竅、下有二竅也。」)　(君臣下)

要するに壁に開いた「竅」があちらとこちらを繋ぐ「道」となる様に、「宙合」に開いた「穴」が「道」であり、「天」に在っては「日」として、「人」に在っては「心」として具現化しているという事である。

(93) 管子曰く、道の天に在る者は日なり、其の人に在る者は心なり。(管子曰、道之在天者日也、其在人者心也。)　(樞言)

この様に「天道」とは「日」であり、「人道」とは「心」であるとするのが『管子』の立場だと推定される。

「心」(注20)

この「道」である「心」は「形」として自生する。

(94) 凡そ心の刑は、自ら充ち自ら盈ち、自ら生じ自ら成る。其の之を失ふ所以は、必ず憂樂喜怒欲利を以てす。(凡心之刑、自充自盈、自生自成。其所以失之、必以憂樂喜怒欲利。)　(内業)

勿論「心」は現象であるので、喜怒哀楽の「氣」の変化で乱される事もあるが、又変化して本来の状態に復帰するとされる。

(95) 能く去憂樂喜怒欲利を去らば、心乃ち反濟す。彼の心の情は、安にして以て寧なるを利とす。煩はす勿く亂す勿れ、和すれば乃ち自ら成る。(能去憂樂喜怒欲利、心乃反濟。彼心之情、利安以寧。勿煩勿亂、和乃自成。) (内業)

それは「心」が「天」を前提に現象している為である。

(96) 天植とは、心なり。天植正しければ、則ち近親に私せず、疏遠を孽まず。(天植者、心也。天植正、則不私近親、不孽疏遠。) (版法解)

つまり「天」という「物」から与えられる優れた「氣」である「神」によって生ずる「人」に限定された「道」の展開が「心」だと考えられる。故に「心」は身体上の君の位置にある。

(97) 心の體に在るは、君の位なり。九竅の職有るは、官の分なり。心其の道に處れば、九竅理に循ふ。(心之在體、君之位也。九竅之有職、官之分也。心處其道、九竅循理。) (心術上)

そして「心」は「道」と「我」を同時に生ずるものであった(引用80)。従って「道」である「心」の生ずる「道」は、更に次元の低い「道」であるが、これが「心」を修め「形」を正す根拠となるとされる。

(98) 道なる者は、口の言ふ能はざる所、目の視る能はざる所、耳の聽く能はざる所なるも、心を修めて形を正す所以なり。(道也者、口之所不能言也、目之所不能視也、耳之所不能聽也、所以修心而正形也。) (内業)

そうであるならば「道」は「虚無無形」の「宙合」から有形の「天地」を通じて流れ込み、「心」の穴を通じて現れる内的な概念以前の思考の流れであるので、愛し、利し、益し、安んずる「道」の現れとしての「心」の働きと同義であると考えられる。

(99) 樞言に曰く、之を愛し之を利し、之を益し之を安ず。四者は道の出なり。帝王は之を用ひて天下治る。

(樞言曰、愛之利之、益之安之。四者道之出。帝王者用之而天下治矣。) (樞言)

それ故にこの「心」は次に「規」、「矩」、「方」を生じて「正」を生ずるが(引用5)、「正」は又人の「心」の次元にある「道」が生む「徳」が生ずるものとされる。

(100) 道は天地を生じ、徳は賢人を出す。道は徳を生じ、徳は正を生じ、正は事を生ず。是を以て聖王は天下を治め、窮すれば則ち反り、終れば則ち始む。(道生天地、徳出賢人。道生徳、徳生正、正生事。是以聖王治天下、窮則反、終則始。) (四時)

「正」

この「正」は「天」に在っては「時」、即ち「陰陽」の合致である。

(101) 時の短長は、陰陽の利用なり。日夜の易るは、陰陽の化なり。然らば則ち陰陽は正なり。正ならずと雖も、有餘も損す可からず、不足も益す可からず。

(時之短長、陰陽之利用也。日夜之易、陰陽之化也。然則陰陽正矣。雖不正、有餘不可損、不足不可益也。) (乗馬)

つまり「日」の「光」が「物」に当って「影」ができ、その変化が「時」とされ、それが実体と合致しているという「正」の認識を生みだす様に、人の「心」から生まれる「道」は「物」に当って「影」としての「我」を生じ、その変化が「生」とされ、それが実体と合致しているという認識が「正」という「心」の働きである。そしてそれが概念と実体を一致させる認識となる(引用68)。「正」は人の基本とされる。

(102) 凡そ人の生や、必ず平正を以てす。之を失ふ所以は、必ず喜怒憂患を以てす。(凡人之生也、必以平正。所以失之、必以喜怒憂患。) (内業)

そこで「我」は「道」と不可分の影である為に「正しく」我が道を貫こうとする。

(103) 當を建て有を立つるは、靖を以て宗と爲し、時を以て寶と爲し、政を以て儀と爲す。和すれば則ち能

く久し。吾が儀に非ざれば利ありと雖も爲さず。吾が當に非ざれば利ありと雖も行はず。吾が道に非ざれば利ありと雖も取らず。（建當立有、以靖爲宗、以時爲寶、以政爲儀。和則能久。非吾儀雖利不爲。非吾當雖利不行。非吾道雖利不取。）（白心）

「我」

この「我」が「道を貴び物を賤しむ」「聖人」の主体である。

（104）是の故に聖人は德を上とし功を下とし、道を尊びて物を賤む。（是故聖人上德而下功、尊道而賤物。）（戒）

つまり主体である「影」、即ち「我」という意識はそれ故に自らの「心」を正そうとする。

（105）能く正能く靜、然る後に能く定る。定心中に在れば、耳目聰明、四枝堅固、以て精の舍と爲す可し。（能正能靜、然後能定。定心在中、耳目聰明、四枝堅固、可以爲精舍。）（內業）

しかしこの正すべき「心」の中には又「心」が有るとされる。

（106）之を治むる者は心なり、之を安ずる者は心なり。心は以て心を藏す、心の中又心有り。（治之者心也、安之者心也。心以藏心、心之中又有心焉。）（內業）

この「心の中又心有り」(注21)とは、「我」が「ことば」で「心」を定義しても、「心」の実体はその「ことば」を生みだす「ことば」を越えた前提として、再びその中心に「ことば」として現れる事を意味するものと思われる。それは「心」が「ことば」を無限に生みだす事に等しいものである。即ち人に在っての「道」とは「音」と「形」を経て「言」、「ことば」として示されるものと考えられる。

（107）彼の心の心は、音以て言に先ず。音あり然る後に形あり、形あり然る後に言あり、言あり然る後に使ひ、使ひ然る後に治る。（彼心之心、音以先言。音然後形、形然後言、言然後使、使然後治。）（內業）

要するに「正」とは概念と実体の一致を認識し調整する「心」の働きで、「ことば」は「物」と「心」を関係づけ

る「道」の現れである。そしてその結果として「時」が「暦」として概念化され「四時」に分類され、万物概念が成立して概念世界が無限に変化する事になる訳である（引用5）。

（108）一言を聞きて以て萬物を貫く、之を道を知ると謂ふ。多言にして當らざるは、其の寡に如かず。（聞一言以貫萬物、謂之知道。多言而不當、不如其寡也。）（戒）

そしてその万物の反映である「我」は、「宙合」自身の認識である「道」が「心」を通じて「物」に当たり、反射として「心」に落とした影である故に、世界の中心の反映でもある。「我」は虚無無形の「道」の果てに分節展開した「宙合」の最先端、生命の最先端の反映、根源の影であり、それ故に人は独立して「道」を選択できる事になると考えられる。最下位の「道」の果てに有る「我」が、さかさまに最上位の「道」の果ての「宙合」に向かう流れ、これが「ことば」の発生源となる。だが具体的な人の「心」は危ういものとされる。

（109）人の心は、悍なり。故に之が法を爲す。法は禮より出で、禮は治より出づ。治禮は、道なり。萬物は治禮を待ちて後定る。（人之心、悍。故爲之法。法出于禮、禮出于治。治禮、道也。萬物待治禮而後定。）（樞言）

従って正す事が必要となる訳だが、それが可能なものは最も上位の「聖人」の「我」とされる故に、「聖人」は「萬物」を概念で治めるものと推定される（引用5）。この様にして「宙合」から発生した「道」は、「我」に到り反射し、「聖人」の「ことば」として形有る「物」を正しくその概念と一致させようとする。

（110）物は固り形有り、形は固り名有りと。此れ言は實に過ぐるを得ず、實は名を延すを得ざるなり。姑く形すに形を以てし、形を以て名を務め、言を督して名を正す。故に聖人と曰ふ。（物固有形、形固有名。此言不得過實、實不得延名。姑形以形、以形務名、督言正名。故曰聖人。）（心術上）

この思考は展開し、「心」の結託を政治的理念に掲げる「一心」体制の確立を目指す。

(111) ①此の若くんば則ち遠近心を一にす。遠近心を一にすれば、則ち戰以て必ず勝つ可く、守以て必ず固なる可し。以て並兼攘奪するに非ず、以て天下の政治を爲すなり。此れ天下を正すの道なり。(若此則遠近一心。遠近一心、則衆寡同力。衆寡同力、則戰可以必勝、而守可以必固。非以並兼攘奪也、以爲天下政治也。此正天下之道也。)　(重令)

②故に一人の治亂は其の心に在り。一國の存亡は其の主に在り。天下の得失は、一人より出づ。(故一人之治亂在其心。一國之存亡在其主。天下得失、道一人出。)　(七主七臣)

その具体化が時令思想であり、

(112) ①刑德は、四時の合なり。刑德時に合すれば、則ち福を生ず。詭あれば則ち禍を生ず。然らば則ち春夏秋冬は將に何をか行はんとす。(刑德者、四時之合也。刑德合於時、則生福。詭則生禍。然則春夏秋冬將何行。)　(四時)

②故に天毀れ菁凶にして、旱水泆するも、民溝壑に入りて乞請する者無きなり。此れ時を守りて以て天權を待つの道なり。(故天毀菁凶、旱水泆、民無入於溝壑乞請者也。此守時以待天權之道也。)(山權數)

又道法思想であり、

(113) ①法は、同じく然らざるを得ざるに出づる所以の者なり。故に殺僇禁誅、以て之を一にするなり。故に事は法に督し、法は權より出、權は道より出づ。(法者、所以同出不得不然者也。故殺僇禁誅以一之也。故事督乎法、法出乎權、權出乎道。)(心術上)

②故に曰く、憲律制度は、必ず道に法る。號令は必ず著明、賞罰は必ず信密にす。此れ民を正すの經なり。(故曰、憲律制度、必法道。號令必著明、賞罰必信密。此正民之經也。)　(法法)

そして「輕重」に由る経済政策となり、

(114) ①管子對へて曰く、國を理む慮戲より以來、未だ輕重を以て能く其の王を成さざる者有らざるなりと。公曰く、何の謂ぞやと。管子對へて曰く、慮戲作り六浮を造り、以て陰陽を迎へ、九九の數を作り、以て天道に合せ、天下之に化す。(管子對曰、自理國慮

戯以來、未有不以輕重而能成其王者也。公曰、何謂。管子對曰、慮戯作造六浮、以迎陰陽、作九九之數、以合天道、而天下化之。（輕重戊）

②此れ輕重を以て天下を御するの道なり。之を數應と謂ふ。（此以輕重御天下之道也。謂之數應。）（山至數）

地理農政上の分類に及び、

(115) 凡そ草土の道、各穀造有り。或は高く或は下り、各草土有り。葉は搏より下り、搏は莧より下り、莧は蒲より下り、蒲は葦より下り、葦は雚より下り、雚は蔞より下り、蔞は荓より下り、荓は蕭より下り、蕭は薜より下り、薜は萑より下り、萑は茅より下る。（凡草土之道、各有穀造。或高或下、各有草土。葉下於搏、搏下於莧、莧下於蒲、蒲下於葦、葦下於雚、雚下於蔞、蔞下於荓、荓下於蕭、蕭下於薜、薜下於萑、萑下於茅。）（地員）

軍事思想として分節すると考えられる。

(116) 善者の兵を爲すや、敵をして虚に據るが若く、景を搏つが若くなら使む。無設無形にして、以て成る可からざる無し。無形無爲にして、以て化す可からざる無し。此を之れ道と謂ふ。亡するが若くして存し、後るるが若くして先んじ、威あるも以て之に命ずるに足らず。（善者之爲兵也、使敵若據虚、若搏景。無設無形焉、無不可以成也。無形無爲焉、無不可以化也。此之謂道矣。若亡而存、若後而先、威不足以命之。）（兵法）

これが「道」の展開である。そしてこれ等全体を扱う術が「心術」である(注22)。

(117) ①心術は、無爲にして竅を制する者なり。（心術者、無爲而制竅者也。）（心術上）

②令を布き必ず行ふに、心術を知らざれば可ならず。（布令必行、不知心術不可。）（七法）

おわりに

以上の分析からすれば『管子』の中心思想は「經言」「幼官篇」の、「無端に始まり無窮に卒る」「道」である（引用69）。この「道」が「心」を通じ「ことば」として

無限に分節する事に基き、「聖人」は「心術」を用い人の心を結び付け一つに合わせ、「天子」を中心にした概念世界を確立する事により「天道」の循環に従い「物」を分類統治して現象の変化に対応し「牧民」しようとした、というのがその思想的展開である。従って『管子』は「道」に基く統治の書であり、それが斉の桓公と管仲を実例として示されていると考えられる。そこで改めて『漢書藝文志』を見ると、

(118) 道家者流は、蓋し史官より出づ。成敗存亡禍福古今の道を歴記し、然る後に要を秉り本を執るを知り、清虚以て自ら守り、卑弱以て自ら持す。此れ君人南面の術なり。堯の克く攘り、易の嗛嗛に合し、一たび謙にして四益ある、此れ其の長ずる所なり。放者之を爲すに及び、則ち禮學を絶去し、兼ねて仁義を棄てむと欲して、曰く、獨り清虚に任ずれば以て治を爲す可しと。(道家者流、蓋出於史官。歴記成敗存亡禍福古今之道、然後知秉要執本、清虚以自守、卑弱以自持。此君人南面之術也。合於堯之克攘、易之嗛嗛、一謙而四益、此其所長也。及放者爲之、則欲絶去禮學、兼棄仁義、曰、獨任清虚可以爲治。)

(『漢書藝文志』)

とあり道家思想とは君人南面の術、つまり政治的統治思想であると説明されている。だとすると積極的に「道」を「ことば」として展開させ、「無爲」の「聖人」が世界を概念化し、心を一つに結び付ける「一心」体制を確立して一人の「天子」の下に「天道」に従い人々の安寧を謀るといった『管子』の立場はこの説明に合致する。そうであるならば『管子』を「道家」に分類する『漢書藝文志』の立場は妥当なものと考えられるし、又『管子』は道家思想の一つの展開例として思想史上に位置づけられる事になると思われる。

注

(1) 金谷治『管子の研究—中国古代思想史の一面—』岩波書店一九八七(序章3頁)

(2) 武内義雄『老子と荘子』岩波書店一九三〇(73頁)『管子』書は「すこぶる雑駁で、新しい材料と古い材料が相混じ思想の矛盾もあるが大体道家と法家との思想が主要な部分となって居る。」とする。金谷氏はこの見解を踏襲していると思われる。

(3) 原宗子「『管子』研究の現状と課題」流通経済大学論集19

（1）一九八四

（4）羅根澤『管子探原』中華書局一九三一　香港太平書局一九六六

（5）張岱年『中国哲学史史料学』三聯書店一九八二（46～47頁）

（6）注（1）同書（結語364頁）

（7）近代以降現在までの研究傾向は部分を集めて全体とするものであり、既成の概念に因る分解と、時間軸に因る資料的分解の二つの方向性がある。最近の研究としては「張連偉『《管子》哲学思想研究』巴蜀書社二〇〇八」が前者を、「張固也『《管子》研究』齊魯書社二〇〇六」が後者を代表するまとまった著作だが、いずれも『管子』自体の持つ統一的視点を求めたものではない。その他部分的比較研究も、既成の枠組みを前提とし、現在の思想史の枠中に『管子』を収めようとする為に、雑駁な資料集という見解に留まるものと思われる。

（8）テキストは『四部叢刊本』を底本とし、中央研究院漢籍電子文献『管子』（上古漢語語料庫）安井衡『管子纂詁』、郭沫若『管子集校』、趙守正『管子注釈』、等を参考に校訂したものを用いた。

（9）「道」全体　原義（道路）（思想的）　通用義（方法）

「經言」（38）（12）（19）（9）

「外言」（45）（5）（33）（22）

「内言」（24）（4）（5）（17）

「短語」（75）（2）（43）（43）

「區言」（25）（1）（16）（10）

「雑篇」（19）（12）（1）（7）

「解」（41）（9）（17）（21）

「輕重」（40）（6）（9）（28）

（合計）（307）（51）（143）（157）（重複44例）

（10）55例中4例は人名の「神農」であり、2例は「鬼神」と「神明」を兼ねる例である。「神農」の4例は（封禪）（形勢解）（揆度）（輕重戊）にある。

（11）「鬼神」系24例―（牧民）「鬼神」（形勢）「鬼神」（權修）「鬼神」（樞言）「鬼神」（小匡）「庶神」（侈靡）「神山」「神次」「神」「神」「神」（心術下）「鬼神」（白心）「神」（水地）「水神」「神」（四時）「神祀」（五行）「神廬」（「神筮」「神龜」）「鬼神」（内業）「鬼神」（小問）「登山之神」（禁藏）「神寶」（形勢解）「鬼神」（山權數）「神」（輕重甲）「鬼神」（輕重丁）「鬼神」

（12）「鬼」を「神」の上位に置く例もある。「故に安危を知るは國の存する所、時を以て天に事へ、天を以て神に事へ、神を以て鬼に事ふ。（故知安危、國之所存、以時事天、以天事神、以神事鬼。）」（侈靡）

(13)「神明」系25例―（形勢）「神」「神」（兵法）「神」（霸言）「神聖」「神聖」（制分）「神」（君臣上）「神明」（君臣下）「神聖」（侈靡）「神」「神」「神」（心術上）「神」「神明」「神」（心術下）「神」（五行）「神明」（内業）「神」「神明」「神」（九守）「神明」「神明」（度地）「神明」（形勢解）「神」「神」（輕重己）「清神」

(14)「氣」概念60例の分布は以下の通りである。形勢（1例）七法（1例）幼官（8例）樞言（1例）兵法（2例）中匡（1例）戒（1例）小稱（2例）侈靡（3例）心術下（3例）水地（3例）四時（5例）五行（5例）内業（12例）七主七臣（2例）禁藏（4例）度地（1例）形勢解（3例）版法解（1例）輕重己（1例）

(15)「氣」の分節例は以下の通りである。「邪氣」（形勢）「地氣」「天氣」「義氣」「燥氣」「坦氣」「絶氣」「淫氣」「陽氣」「陰氣」（幼官）「血氣」（中匡）「六氣」（戒）「怨氣」「懼氣」（小稱）「變氣」「精氣」「平氣」「餘氣」「愛氣」「滿虛哀樂之氣」「風氣」（侈靡）「善氣」「惡氣」（心術下）「雲氣」（水地）「賊氣」（四時）「鬱氣」（五行）「善氣」「惡氣」「寛氣」「靈氣」（内業）「逆氣」（七主七臣）「離氣」（禁藏）「霧氣」（輕重己）

(16)「物」概念314例は、①対象としての「物」138例、②限定された対象としての「〇物」54例（「財物」28例「異物」5例「衆物」3例「旗物」3例「生物」2例「小物」2例「人物」2例　以下各1例「無用之物」、「曲物」、「大物」、「奇物」、「器物」、「危物」、「百物」、「土物」、「穀物」）、③概念分類された対象の総称としての「萬物」122例の三つに分類できる。

(17)「地」は354例あるが、「天地」63例、「土地」4例の他は単独で用いられ、「地道」、「地徳」、「地義」、「地理」、「地氣」、「地利」等の概念を含むものとされる。

(18)「天」は786例あるが「天」を限定する概念は無く、「天」単独の116例の他は「天子」（83例）「天地」「天時」「天道」「天之常」「天之命」「天権」「天極」「天心」「天壤」「天筴」「天祥」「天賞」「天菑」「天禍」「天凶」「天勢」「天氣」「天下」「天植」「天固」「天材」「天財」の例がある。

(19)「道」概念は①形而上の「道」15例「幼官（1例）宙合（1例）兵法（3例）心術上（3例）水地（1例）四時（1例）内業（4例）形勢解（1例）」、②「天地萬物」の「道」で人の従うべき「道」34例「形勢（2例）立政（1例）五輔（1例）宙合（2例）樞言（3例）重令（1例）中匡（1例）霸言（1例）制分（1例）君臣下（1例）侈靡（4例）心術上（3例）白心（1例）五行（3例）地員（1例）形勢解（5例）山權數（1例）輕重甲（1例）輕重戊（1例）」、③人が扱える「道」263例「牧民（2例）形勢（7例）權修

（2例）立政（3例）乗馬（10例）七法（4例）幼官（3例）五輔（3例）宙合（5例）樞言（4例）八觀（3例）法禁（5例）重令（2例）法法（12例）兵法（1例）大匡（4例）中匡（2例）小匡（6例）霸形（2例）霸言（3例）問（3例）戒（3例）地圖（1例）參患（1例）制分（3例）君臣上（8例）君臣下（12例）小稱（3例）四稱（7例）侈靡（9例）心術上（7例）心術下（2例）白心（5例）水地（1例）五行（1例）勢（2例）正（1例）任法（7例）明法（3例）正世（3例）治國（3例）內業（5例）小問（3例）七主七臣（5例）禁藏（5例）桓公問（1例）度地（3例）弟子職（1例）形勢解（19例）立政九敗解（1例）版法解（4例）明法解（10例）國蓄（1例）山國軌（1例）山權數（4例）山至數（3例）地數（2例）揆度（1例）輕重甲（5例）輕重乙（8例）輕重丁（9例）輕重戊（3例）輕重己（1例）」（重複5例）に分類できる。

（20）「心」は121例あるが、心臓を指す「水地篇」の1例を除けば、すべて思考や意志を発する概念的中心の例である。「心」（「人心」）は人に一つあるものとされ、「民心」「君心」「王者之心」等の立場に因る分節例及び「疑心」「戰心」「小心」「全心」「定心」「姦心」「二心」「心之心」等の状態に因る分節例がある。

（21）金谷 治『心の中の心―中国古代心理説の展開―』追手門学院大学二十周年記念論集文学部篇一九八七は、これが『管子』に特徴的なものであるとし、『孟子』、『老子』、『荘子』、『荀子』、『論語』中の関連思想との比較検討を行い既成の思想史上の位置を考察して、秦漢の際の成立とみられる『中庸』の誠の哲学に影響を与えたものであろうとしている。

（22）浅野裕一『道法を生ず―道法思想の展開―』島根大学教育学部紀要（人文社会科学）第十六巻一九八二は、「『管子』心術上篇の基盤は、独特の心術思想であって、やはり道法思想は、心術思想全体の中に限定的な位置を占めるに止まっている。」と既に指摘している。